特集・都市と精神の問題

都市構造と生活空間

——精神衛生的な考え方——

特集 1

竹山恒寿

目次

1——はじめに
2——家庭空間
3——学校・職場空間
4——流動空間
5——情報空間
6——おわりに

1——はじめに

精神衛生運動は，ビアースのはじめたころは精神障害者の救済活動であったが，その後，児童・青少年の問題，非行・犯罪の問題，老人問題など，およそ心の健康につながる諸問題にまで拡大され，その対象とされるようになった。心の健康を論ずるとき，人間の素質のありかたと共に，環境的な要因もまた無視されてはならないことである。殊に都市生活をするものにとって，その都市の構造そのものが心のありかたに重大なかかわりをもってくることを指摘せねばならない。およそ人間の生活には，生活空間というものがある。環境それ自身である。家庭や職場，社会人としての人のつながりの場，それはとりもなおさず生活空間である。都市における生活空間は，都市の構造そのものが重大な意味をもっているけれど，それは家庭生活の場でも学校や職場の場でも無関係ではないので，それらについて考えをすすめてゆこう。

2——家庭空間

第1空間とよばれるものである。それは，はじめに人間が形成される場であり，精神衛生的にも重要な意味をもつ空間である。現代の家では核家族ということが特徴的であって，農山村あるいは田園的な地域での家族構成とくらべても都市におけるそれは核家族化が著しい。特に単身世帯という現象すらみられるのが都市の実状である。一般的にいって，都市における家族構成員の数は少ない。平均的にいえば，夫婦に子供が一人か二人というような数になっている。そこにみられるのはマイホーム主義に徹した親の姿である。

ドラッガーという経営学者が職業人のタイプを三

種にわけて，マネジャー志向型，専門家志向型，マイホーム志向型としていて，現代では核家族化の進行と共にマイホーム志向型が圧倒的にふえているという。小人数の子供を持つマイホーム志向型に徹した親の生活行働は，過保護，過干渉に傾いてしまう。それが現代における平均的な親の姿である。こうした親子関係からは自律性に乏しく無気力で，ノイローゼ的な傾向にはしったり，未熟な人間形成のままに外界攻撃をやったりする青少年が育成されてくる。核家族化は現代の病根の一つであるとさえいわれる。

第一空間としての家のありかたは，いろいろな影響を子供にあたえる。もしそれが多子家族であれば，同胞間の順位なども人間形成に影響を与えることがしばしばである。たとえば偏食や小食の問題も長子に多く，多食傾向は中間子にみられる。これなどは愛情の満足に関係したことである。家庭空間の問題は，子供の育成にばかり関係したことではない。夫婦のありかた，老人のありかたなどにも関係してくる。都市の孤独な老人は，適切な人間関係をもたず，経済的にも再生産をよぎなくされるという始末で，都市の老人問題がここに発生する。

人間の形成にとって，幼少年期にうける親の影響は大きいものである。この時代では，特に母親のありかたが，子供に直接関係あるものとして重視されるが，父親の役割も無視し得ないものがある。特に児童期から青少年期に達した子供にとっては，父の姿は大きい意味を投げかける。マイホーム主義に傾いた父親の姿は勤労的な姿勢を子供の前に投げかけることが出来ず，その保護的，享楽的な一面だけしかのぞかせないので，社会人としての姿を伝えることができない。このことは子供の社会的な発達にとって不幸なことである。

一方において，子供に対して無関心，放任的な親が少数ではあるが存在する。子捨てや子殺しに端的に象徴されているように，自己の都合だけしか考えず，子供を度外視している親も存在しているのは事実である。こうした親子関係からは，子供の非行化，犯罪化という現象が生みだされてくる。病める家族である。

3――――学校・職場空間

第2空間ともいわれるものである。子供はその成長の過程において，次第に生活の空間を拡げる。幼時のはじめの頃は，家庭に限らたていたものが，次第に行働の範囲をひろげて，近隣での遊びの場を持つようになる。しかし，これは第一空間の拡大されたものにすぎないといえよう。まだフォーマルに用意された外的空間ではないからである。彼らはやがて学校へ通うようになり，そこで交友や教師との交流を通じて社会行働を習得するようになる。そこは子供にとって，はじめての社会生活の場である。しかし，そこで適応失敗も味うことがある。現代の保護的な家庭では，分離不安が著しく，親と子，特に母と子の密着が指摘される。子供は学校という社会的な場に出ることに緊張を感じ，神経症的な学校嫌いを生じ，やがては登校拒否というきわめて現代的な病況にまで発展する。こうした不適応現象は学校生活の場で示されるだけではない。分離不安的な自律性の乏しい人格を固定してしまった青年は，職場生活においても不適応を呈する。

精神衛生的にみれば職場生活のありかたもまた重要である。成人に達してから後は，精神衛生上の問題は家庭生活場面ばかりでなく，職場生活からも発生する。現代の都会では，職場は家庭の外にあることが多くなっている。農業や一部の商工業をのぞいては，職場は家庭から離れたところにある。職場の緊張が家庭に持ち帰られることがない

という利点はあるが，前述したように働く親の姿をその子弟に伝えられないという欠点も出てくる。現代では，家庭における職業教育の機能が放棄されている。そして職場は遠く，一時間以内の通勤圏はまだ便利な方だという始末である。職場では，その機能を遂行する歯車として，人間の存在がみられ，複雑な仕組みの中で作業完遂のよろこびがなかなか味えない。人間関係管理に関する配慮が乏しい職場が大部分なので，その中で生まれた緊張が，昇華し解消されるのはしばしば困難となる。さらに働く青少年の指導に関して，適切な管理体制をもっている職場は少ない。殊に余暇の利用に関して，適当な指導がなされない。彼らは，金の卵として地方から募集されるものも多く，経済的な待遇に関しては一応考慮されているものの，その生活条件，特に余暇の過し方について全く放任状態にある。彼らが職場から転落し，より安易で享楽的な職場へと転々として移っていく状態があることについて企業は責任を感ずることがないのであろうか。

4――――流動空間

第3空間ともいわれる。都市が都市化されるということは，第3空間がいかに形成されるかということに，かかわりがある。都市の都市たるべき最大の条件であり，これが整わなければ，いかに人口が多いからといって，それは巨大な田舎にすぎない。流動空間というものは，家庭空間と学校や職場の空間との間によこたわるもので，通学や通勤，あるいはショッピングや娯楽を求めて，人が流動する場をいうのである。これは，商業的には関心がもたれる空間なので，いきおい商業主義的な構成がなされてしまいがちであるという宿命をもっている。現代は，職住分離が一般的な姿なので，市民はこの流動空間を利用せざるをえない。あるものは，振り子型といって職場と住居の間を往復するだけで，第3空間は通過空間であるにすぎない。あるものはしばらくの時間これを利用するのであって，これを立ち寄り型という。多くの市民はこの立ち寄り型的な利用をしている。しかし，なかには入り浸り型といって，生活時間の大部分をこの空間で過し，現実の生活には不適応を示してしまっているものもある。流動空間では，人はその特有の人格を失い，所属も不明確となり，匿名の個人として行働するから，自由感があり，他の空間で得られない魅力をそこに感ずるようになる。そこに流動空間のもつ主観的長所と客観的ワナがある。このように流働空間は，人間をそこなう機会や可能性も大きいものであるが，また同時に群衆の中の人間として，人とかかわりあいをもち，時には行働を共にするということで，社会性の成長という点からみれば，あながちそれがまずい存在ともいえないのである。

好むと好まざるとにかかわらず，第3空間の存在は，都市の都市たる所以であるといえる。問題は人間がこの流動空間をいかに利用するかということであり、また，この流動空間をいかに整備していくかということである。人間は流動空間に対して強い魅力を感じている。とりもなおさず都市の魅力である。これを商業主義の意図のままに構成させ，運営させていくということでは，あまりに行政の姿勢が心もとないものに感じられる。スポーツ，趣味，芸術，福祉活働，自治活働，その他望ましい活動が集団の中で遂行されるのは，この流動的な場においてである。青少年活働，社会教育活動，老人福祉活動等が，この第3空間で結実するように図り，そのために施設や機関を充実させるのが行政当局の市民に対する価値あるサービスだといえるようである。たとえば，図書館，博物館，美術館，運動施設，市民教室，勤労青少年

会館をふくむ青少年会館，児童会館，公園，公会堂など，第3空間に意味のある設備が用意されて，都市ははじめて都市らしくなる。ここで注意しなくてはならぬのは，どの程度の規模のものが，どの程度の数で出来ているのがのぞましいのかということである。多ければ多いほどよいというものでもないし，少なすぎれば地域的に偏在して，行政サービスが不公平におちいってしまう。経済的な裏付けということも考えねばならぬであろう。この規準を設定することこそ重要な作業となろう。たとえば青少年のための施設である。それは現在のモータリゼーションという問題を念頭においても，青少年の利用しうる範囲はそれほど広域ではない。彼らの行動半径は750米ぐらいが適当だという説もあり，遠方の施設は頻繁に使われることがない。豪華で完備した施設は別として，普通に使用される施設は，直径1500米の範囲に一つということになるから，行政としては大変な負担になってしまう。ある程度の設備をもち，かなり多くの数で青少年が利用するという施設の数や規模を考えるのがシビル・ミニマム設定という大きな作業になる。老人のための施設にしても児童施設にしてもそうである。一つの都市で，文化的な流動空間を準備しようとすることは，大変な作業である。そうかといって，この作業を放置して，商業主義的な空間設定を腕をこまねいて見ているというだけであっては，行政が無能であるというそしりをまぬがれることは出来ないであろう。そして，そのことは人間形成に関して，また人間の適応に関して，精神衛生上の問題点を作りあげるという結果にもなってしまうのである。さらに行政にのぞみたいことは，精神衛生的な対策がおこなわれるにしても，流動空間の整備ということが実施されるにしても，施設や機関の担当がばらばらで，同じく図書館であっても教育委員会の管理になるものもあれば，市民局の管理であるというものもあって，図書館行政はいかにあるべきかというまとまった姿勢が出ていないことである。第3空間の文化的で有効な設定ということに関しても，行政当局は一段と工夫をされるべきではないであろうか。

5――――情報空間

第4空間ともいわれる。家庭や職場や流動的空間のような一定の面をもった空間とはちがって，精神的に人間に影響をあたえる次元の異った空間であり，現代人はこうした情報を大量にうけているし，ことに都市のようなマスメディアの錯綜した場では，過剰な情報にさらされて，自己の意志決定も自由ではなくなりがちな現状である。テレビ，ラジオ，映画，出版物，広告のたぐいは全国いたるところに流されて，それは都市に対する虚像を全国的にばらまいてもいるが，都市においては，殊にマスメディアの氾濫，人間関係による情報等により，市民は包囲され，その影響をつよくうける。情報の影響は都市においては過熱と冷却の循環という現象をみせている。この情報の一種に社会風潮というものがある。あるいはマスメディアによってかきたてられ，あるいは流行として社会に浸透している現象で，精神衛生的にみればこうした社会風潮の影響によって作りだされた，一連の風俗現象には無視出来ないものがある。暴力，性，薬物乱用などに関する現象がそれである。

現代の社会，殊に都市生活においては，アノミーという現象が一般的になっている。社会環境が整備され，強固な体制が形づくられていると，大衆は自己実現の機会がなく，社会慣習の歯車の一員として，その体制を維持する存在にしかすぎなくなってしまう。こういう非人間的で退屈なありか

たに関して，人は反撥を感じ，慣習無視の行動に走ることがしばしばある。殊に自己実現の欲求の強い，青少年期においてはそうである。たとえばシンナーを吸引した少年達をしらべると，彼らが，まずは平均的な少年であり，平均的な家庭をもっていることが多かった。それなのに彼らは，社会から非難されるシンナーの吸引行為にはしったのである。こういう現象をアノミーという。シンナー吸引の害が情報として流布されればされるほど，彼らのシンナーに関する関心はたかまり，昭和47年法令によって禁止されるまでつづいたのであり，その後も完全にはあとを絶っていない。同じく薬物乱用の流行は大麻やＬＳＤにまでおよんでいる。シンナー等の有機溶剤，大麻，ＬＳＤ等はいずれも幻覚剤である。これを施用すれば，酩酊や幻覚などの超日常性体験がえられる。睡眠薬や鎮痛薬などの薬物乱用にしても，そうである。アノミー的な志向は，日常性をこえた体験を求める。いわゆるサイケデリック，すなわち精神拡大というもので，薬物によって現実的，日常的でない精神の拡りを得ようとするのである。薬物乱用には，医療的な施用からはじまったり，神経症的な理由で施用したり，非行的な生活の間におぼえたりするものもあるが，現代的，都市的な施用のタイプとして，この脱線的，アノミー的な薬物乱用が，青少年の間にひろがっているのである。

現代人は情報の影響から離れていることは出来ない。いりみだれた情報を，主体性をもって選択し，判断していくことが，精神衛生上のぞましいことではあるが，人格形成の途上にある青少年にとっては，それがむづかしいのである。表現の自由というのは憲法でも保障された基本的な人権ではあるが，表現には試行錯誤という問題もあって，公共の福祉のためには自制がのぞましい場合も出来てくる。薬物の乱用や性風俗の脱線，暴力の礼賛などに関して表現する場合に，殊にそうである。

6――――おわりに

現代の都市には，その構造上，精神衛生的にみれば，問題点と利用しうべき点が多々ある。市民各自の知恵や意識のありかたが，それらを解決してゆくことであろうが，行政としても市民の意識や行動に，手をさしのべてゆかねばならないように思われる。大気汚染や水質汚濁，騒音や振動などの都市公害が問題になるばかりでなく，精神的にも健全な市民生活を形成してゆくよう，市民も行政当局も心がけるべきではないであろうか。

＜湘南病院長・東京慈恵会医科大学教授＞